アートサイト直島にみる社会的広域圏形成プロセスの展開

清水　李太郎　*Ritaro SHIMIZU*
九州大学 大学院人間環境学府･博士後期課程 単位取得退学

坂井　猛　*Takeru SAKAI*
九州大学 本部キャンパス計画室 教授･副室長
九州大学 大学院人間環境学府･工学部建築学科 教授

■**要旨**：筆者らは先行研究において社会問題解決型で持続的な広域圏形成のプロセスを" 社会的広域圏形成プロセス" として定義し[1)]、人口縮退の影響下にある広域圏における事例分析のための理論的な枠組みを構築した。本稿はそのケーススタディとして、人口減少の進む瀬戸内海の小島に位置する直島町において、1980 年代から民間企業であるベネッセ社の主導により実現したアートサイト直島に焦点を当てる。本稿では上述の理論的枠組みを用いた詳細な事例分析を通して、空間開発の主体としての民間企業の首尾一貫した関与の重要性、国や県などの広域的な行政機関の掲げる社会的･経済的な開発目標との接点を生み出すことの重要性を示した。特に重要な知見として､アートサイト直島のプロジェクトでは何気ない日々の生活の空間を含めた大小様々なスケールの余剰空間を、現代アートを通した創造的な空間開発と多様な社会的交流のためのプラットフォームとして活用していることが挙げられる。このような余剰空間の活用方法はプロジェクトに関与するアーティストやデザイナーだけでなく、一般の地域住民に対しても主体的な関与の機会を生み出し、都市部と地方部を結ぶ多様な社会的関係性を生み出しながらプロジェクトの発展的展開を支えていることが明らかになった。

■**キーワード**：広域圏形成プロセス、ランドスケープアーバニズム、ソーシャルイノベーション、アートサイト直島

1.　はじめに

1.1.　研究の背景と目的

近年、日本では空き家の増加を背景として、その改修を通して地域住民とともにまちづくりに取り組むリノベーションまちづくりが注目を集めている。人口縮退の影響が顕在化する地方部では、空き家や空地などの余剰空間の発生率が高く、空間開発の介入の方法次第では小さなクラスターを形成しつつ広域的な波及効果を生み出すことが期待される。欧米諸国を中心に展開するランドスケープアーバニズムやソーシャルイノベーションなどの広域圏形成を巡る議論でも同様に、地域の生活空間に生じる余剰空間を活用した空間開発を導入することで、多様な人間関係を形成しながら広域的な領域に新しいアイデンティティを生み出す重要性が指摘されている[2~11)]。地方部では既にグランドワークトラストのように地域住民を主体とするボトムアップ型の活動を通して自然環境保全を行う事例が数多く見られるが、人口縮退が進行する社会情勢下では、環境保全という受け身的な姿勢だけでなく、日々の生活が営まれる居住地までを取り入れた様々な余剰空間を活用し、地域住民を取り込みながら包括的に地域の新しい発展の仕組みを創造することが重要といえる。

また、都市化の進行による地方部の衰退は発展途上のアジア諸国における今後の課題としても共通しており、日本の地方部における人口縮退への取り組みを通して都市部と地方部に新しい関係性を創出する発展のあり方を考案することは、都市政策と地域政策分野が協働で取り組む共通の課題として位置づけられる必要があり、研究の意義は大きい。

筆者らは先行研究においてランドスケープアーバニズムやソーシャルイノベーションなどの近年の欧米諸国における広域圏形成の議論を検証し、「地域に潜在する余剰空間の多面的な活用」、「多様な空間的次元を横断した関係性の形成」、「生活の質の向上と人間性の再生」、「文化的アイデンティティの形成」、「フレームワークに沿ったプロセス志向の発展」という5つの要件を社会的広域圏形成プロセスの理論的枠組みとして整理した[1)]。

本稿では人口縮退が進む日本の地方部において、地域社会に潜在する余剰空間の活用を通して広域圏に新しいアイデンティティを形成するベネッセアートサイト直島と関連地域における取り組みを社会的広域圏形成プロセスの事例として位置づけ、都市部と地方部を結ぶ多様な社会的関係性を生み出しながらプロジェクトの発展的展開を支える要因について、上述の論理的枠組みとの具体的な関係性を通して体系的に明らかにすることを研究の目的とする。

1.2. 研究の位置づけ

地域社会に潜在する余剰空間の活用を巡る既往研究に着目すると、主に地方都市や中山間地域における空き家の活用に関する研究が多く見られる。利用可能な空き家についての情報提供事業や空き家の活用に対する助成制度、移住者の受け皿として空き家を活用するために相談から仕事・住宅の紹介までを行う総合支援事業など、空き家を地域のストックとして適切に維持・管理する制度の特徴と運用上の課題を明らかにしている[12)]。中園らは伝統的民家の空き家の活用方法の中でも上位自治体が導入した「借り上げ＋助成金制度」という空き家の活用に関する先進事例として「ふるさと定住財団」を取り上げ、その特徴と制度の運用状況や、実際に移住する人々のニーズ、移住の受け皿となる空き家の活用実態について論じている。これらは制度化された行政的システムに基づく取り組みや、制度そのものの特徴、運用上の課題等に視点を置いている。空き家を介した移住・定住の促進という視点の他には、ボトムアップ型のまちづくりの視点から空き家を地域の公共空間として活用する取り組みもみられる[13)-18)]。

この他に農村計画や建築計画の研究分野が中心となり、伝統的な農家や空き家の転用など、空き家の転用の技術的側面や空間の変容、転用による多様な社会的役割の形成に与える効果などに着目する研究が数多く見られるが、これらは個々の転用の事例の詳細な分析や、いくつかの空き家が集まる領域を限定した地区レベルでの研究が多く、多様な余剰空間の活用を通した社会的関係性の形成や、広域的な領域の発展を促す新しい価値の創出など、広域圏形成やアーバニズムの視点からその多面的効果について論じた研究は少ない。

一方でアートサイト直島に関する既往研究ではプロジェクトの始動期から現在に至るまでの変遷をまとめたもの[19-24)]、ベネッセアートサイト直島のイメージを観光ガイドや町史、収蔵される美術品の解読を通して明らかにしたもの[25)]、地域住民を引き込み地域資本化する現代アートを用いた空間開発手法の可能性や、個々の事例を通して地域住民の等身大の関与が生み出されていくプロセスについて明らかにしたもの[26-27)]、地方部の自然環境の中で風土性を帯びた現代アートが生み出す新しい発展の可能性と社会的意義について論じたもの[28)]など、多くの文献が挙げられる。本論文はこれらの既往研究に基づくケーススタディを通して、都市部と地方部を結ぶ多様な社会的関係性を生み出しながらプロジェクトの発展的展開を支える様々な要因について、先行研究で整理した社会的広域圏形成プロセスの理論的枠組みとの具体的な関係性を通して質的実証研究の視点から体系的に明らかにするに新規性がある。

1.3. 研究の方法

本稿では1980年代から継続的に事業が進められるベネッセアートサイト直島とその周辺地域における一連の取組みをケーススタディの対象とする。分析に際しては同プロジェクトに関する書籍及びウェブ上で入手可能なアーカイブ資料[19-28)]を用い、研究は以下に示すように4つの手順に沿って進める。まず対象地域で行われたプロジェクトの展開の概要について時系列で整理する。次にプロジェクトの進行の中で実現した余剰空間を活用した空間開発のあ

り方について、その介入方法の特徴と影響を及ぼす地理的な範囲に留意しながら分析を進める。これらの概要分析を行った後に、余剰空間の活用が人々の意識の変化や共生社会の形成に与える影響を分析する。最後に社会的広域圏形成プロセスの理論的枠組みを用い、多様な余剰空間の活用が持続的な広域的の発展に対して与える多面的な効果を詳細に考察する。

1.4. 研究の対象

アートサイト直島とその周辺のプロジェクトは、四国地方と中国地方の境界地域の瀬戸内海に位置する島々で、地元の大手民間企業のベネッセ社が主体となって手掛ける現代アートを介した空間開発による広域圏形成の事例である（図1）。一時的なインスタレーションから美術館建設に至るまで、大小さまざまなスケールの空間開発が直島や周辺の島々に展開している。1980年代から現在に至るベネッセ社の継続した関与によって、高齢化と人口減少が進む瀬戸内海の広範な地域の活性化と持続的なプロジェクトの展開を実現している。このことからアートサイト直島は、多様な余剰空間を活用した空間開発が持続的な広域圏形成に与える影響について論じる上で、先進的な事例として位置づけられる。

直島町は2015年時点で人口3135人、最も大きな島の直島は南北に2km、東西に5kmという、瀬戸内海に浮かぶ小さな島である。島の土地利用は北部・中部・南部の3つのエリアに大きく区分され、北部には三菱マテリアルの精銅所跡地からなる工業的土地利用、中部は役場などの公的機関と居住地、南部はベネッセ社が所有する広大な自然地域で構成される。直島は2つの上位自治体である岡山県と香川県の県境地域に位置する。一方は太平洋ベルトの岡山～大阪にかけての高密度に市街化した地域に近接し、他方では香川県の人口減少地域として広域的な地域振興の対象として位置づけられ、空間開発のための性格の異なる資源を同時に活用できる立地にあることも特徴的である。

図1　アートサイト直島の位置

出所：筆者作成

2. アートサイト直島のプロジェクトの展開

アートサイト直島がプロジェクトを開始した当時は、国土計画で第三次全国総合開発計画が策定され、全国各地でリゾート開発が進められた高度経済成長期の特徴的な時期に位置づけられる。同プロジェクトは1990年代のバブル崩壊、1997年以降の地方分権の推進、近年の道州制の提案といった国土計画的な大きな風潮の変化の中で、その時々のニーズに応えながら時間をかけてプロジェクトを発展させてきた。アートサイト直島の大きな特徴は、広大な土地を所有する民間企業による長期間に渡る首尾一貫した関与が行われてきたことである。プロジェクトの展開には①初期の自治体の首長の主導による都市計画的なアプローチの時期、②1980年以降のベネッセ社と直島町の官民共同のパートナーシップの時期、③プロジェクトの方向性が明確化し、段階的発展を見せる1990年代、④公的セクターの積極的な関与が再び行われる2000年以降、⑥そして多くの利害関係者を取り込んだ広域圏再生のイベントである「瀬戸内国際芸術祭」が行われるようになる2010年以降のように、約10年のタイムスパンを区切りとして特徴的なプロジェクトの方向性が見出される（次頁図2）。

2.1. 自治体首長の主導による都市計画的アプローチ（1980年代以前）

アートサイト直島の前身となる直島町の発展は、直島町町長の三宅親連氏（任期1959年～1995年）

の施政が大きく影響している。1960 年に策定された土地利用計画では、島全体を北部・中部・南部の 3 つに分ける土地利用の基本的な方針が定められた。これは典型的なゾーニングプラン型の形式ではあるものの、直島南部の土地利用方針として定められた自然景観の保全・観光産業の促進という基本方針によって、南部地域の自然環境が高度経済成長期の中でも開発されずに保全されることになる。また、1980 年代までに直島町に建設された小学校・中学校などの公的施設の設計には国内の著名建築家が起用され、白を基調にした現代的なデザインと島の原風景的な環境のコントラストという、現在の直島を特徴づけるデザインを通して、都市部との関係性が既に生み出されていた。

2.2. 官民のパートナーシップによる展開（1980 年代以降）

1985 年に瀬戸内海を挟んで隣接する岡山県に本社を持つベネッセ社の福武哲彦社長が直島町長の三宅氏と面会したことが直島におけるプロジェクトの転機といわれている。瀬戸内海に国際交流のためのキャンプ場を建設したいという福武氏と、直島町の南部を文化的で健康で綺麗な自然観光の地域にしたいという三宅氏のビジョンの共有がこの時になされている。この直後に直島町の南部の 165 ヘクタールの土地がベネッセ社によって購入され、これに呼応するように 1988 年に直島町は直島文化村構想を策定している。ベネッセ社が手掛ける最初のプロジェクトである直島国際キャンプ場はこれらの一連の出来事の直後の 1989 年に建築家の安藤忠雄氏の監修の下で完成した。

2.3. アートサイト直島の開発方針の確立（1990 年代初頭）

1992 年に現代アートの美術館と宿泊施設の機能を複合したベネッセハウスが完成する。初期のベネッセハウスではさまざまな芸術様式の企画展示が繰り返されるが、徐々に常設型の展示形式に移行していく。これと同時に多くの屋外展示のアート作品の設置も行われるようになる。この屋外の風景に合わ

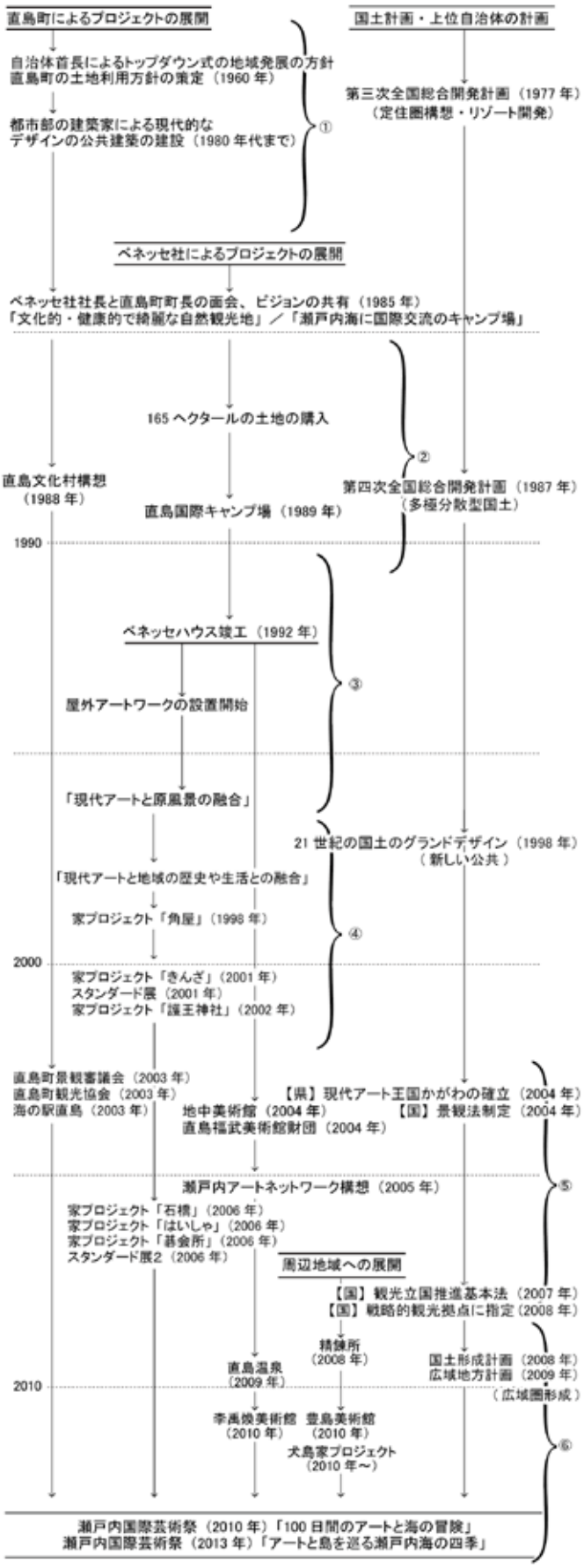

図２　アートサイト直島のプロジェクトの展開

出所：参考文献 19-28 を基に筆者作成

せて設置されるアート作品を通して、ベネッセ社は「現代アートと島の原風景の融合」という、初期のプロジェクトの基本方針を明確化していった。同時に美術館を周辺の住民に対して無料で開放することで、地域に開かれた施設となる試みもこの時期に模索されている。

2.4. 敷地を越えた展開（1990 年代後半～ 2000 年代）

1990 年代後半になると、直島町からの依頼で空き家の有効活用へプロジェクトが発展し、敷地を越えた展開を見せるようになる。1998 年に最初の家（空き家）プロジェクトが完成し、地域の空き家が現代アートのインスタレーションの場として再利用されるようになった。2001 年には直島全体をアート展示会の会場とするスタンダード展が開催され、

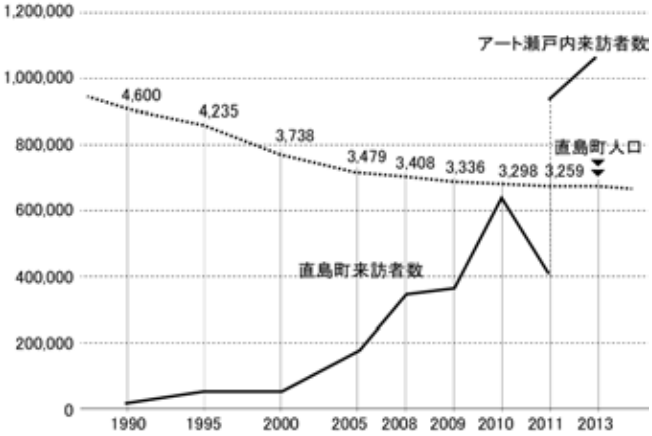

図３　アートサイト直島の人口と来訪者数の推移

出所：参考文献 19-28 を基に筆者作成

人口減少が続く直島では、この時期を境に来訪者数が年毎に増加し、人口減少率の低下が見られるようになった（図 3）。2004 年には直島福武美術館財団が設立され、同年に地中美術館が竣工する。2006 年に第 2 回目のスタンダード展が開催され、それまでの時期に新たに 6 つの空き家プロジェクトが実現している。

2.5. 公的主体の積極的な関与のはじまり（2000 年代以降）

アートサイト直島のプロジェクトの活性化に合わせて、直島町だけでなく上位行政機関である県や国もまた同プロジェクトへの関与を始めるようになる。直島町では 2002 年に景観条例が施行され、町内で修景プロジェクトが行われた。更に 2003 年には観光情報の提供を行う直島観光協会が設立され、同協会が運営する「海の駅直島」が建設された。翌年の 2004 年は国内で景観法が施行された年でもある。この年には香川県の若手職員によって「現代アート王国かがわの確立」が提案され、ベネッセ社も 2005 年に「瀬戸内アートネットワーク構想」を提案している。2008 年には観光庁がアートサイト直島を地方部の戦略的な観光拠点として指定するなど、この時期に様々な公的主体の関与が誘発されている。

2.6. 瀬戸内海一帯の広域的形成（2010 年以降）

2008 年には岡山市に属する離島の犬島で精錬所が美術館としてリノベーションされ、近隣の集落では直島と同様に家プロジェクトが実施されている。更に 2010 年には土庄町豊島で豊島美術館が建設されている。直島町では 2009 年にアーティストによるデザインの直島温泉がオープンし、町内の空き家を改修した小さな宿泊施設や飲食店も展開している。

一方で官民の広域的な地域振興への機運の高まりは、両者の連携の下で 2010 年と 2013 年の瀬戸内国際芸術祭として実現した。瀬戸内国際芸術祭 2010 では「100 日間のアートと海の冒険」と題され、香川県で最大の港の高松港、アートサイト直島とその周辺の 7 つの島が会場になった。18 ヶ国 75 組のアーティストが参加、16 のイベントが開催され、来場者の数は 105 日間で 94 万人に上った。瀬戸内国際芸術祭 2013 では「アートと島を巡る瀬戸内海の四季」と題され、春・夏・秋の 3 つの期間に分けてそれぞれイベントが開催された。会場は 2010 年の会場に新たに 5 つの島を加えており、105 日間合計で 107 万人の来場者数、26 ヶ国 200 組のアーティストが参加、40 のイベントの開催など、その規模を大きくしている。今後も広域圏を挙げたイベントして定期的な開催が予定されている。

3. 現代アートを介した多様なスケールの空間開発

アートサイト直島のプロジェクトの展開で特徴的なことは、美術館や海の駅のような拠点的施設だけでなく、町の中の空き家や砂浜、草地などの何気ない生活空間の全てを、プロジェクトを演出する要素として積極的に取り込んでいることである。そして現代アートの創作活動には日々の生活環境や地域の歴史など、瀬戸内海の原風景的景観に対する詩的な想像力を働かせた質的な価値が付加されている。

3.1. 家プロジェクト

1998年から始まった家プロジェクトでは直島や犬島（岡山市）の集落にある空き家のリノベーションや空地の活用を通して現代アートのインスタレーションの場にするものである（表１）。空き家の改修やアートワークの制作の中には地域住民の参加を取り込みながら進められたものもある。初期のプロジェクトである角屋（1998年）に始まり、きんざ（2002年）、護王神社（2002年）、石橋（2006年）、はいしゃ（2006年）、碁会所（2006年）の合計６つのプロジェクトが生み出され、作家が独自の作風を適用したもの、地域の歴史や記憶を反映したものや活かしたものなど、それぞれの家プロジェクトに異なるデザインが施されている（表1）。　岡山県岡山市の犬島においても2010年以降、Ｆ邸、Ｉ邸、Ｃ邸、Ａ邸、Ｓ邸、Ｆ邸、中の谷東屋、石職人の家跡の合計８つの家プロジェクトが生み出されている。島内の空地を使ったこれらの新築のプロジェクトでは抽象的なデザインの外観を持つものと、島内の風景に馴染むようにデザインされたものがあり、いずれも町並みが老朽化し、高齢化が進む島の風景に現代的な価値を付加している（表2）。

表１　直島家プロジェクト

直島・家プロジェクト					
名称	制作者	職業	建設年	敷地	デザインの特徴
角屋	宮島達男	現代芸術家	1998	空家	水中に沈めた様々な色のライトがランダムな時間で点滅するデザイン、住民を交えたワークショップによって実現
きんざ	内藤礼	彫刻家	2001	空家	作家のアートワークの世界観を室内全体を使って表現したデザイン
護王神社	杉本博司	写真家	2002	神社跡地（空地）	新築のプロジェクト、寺が存在していた場所神社建築の原型（伊勢神宮・古墳）をモチーフにしたデザイン
南寺	安藤忠雄	建築家	1999	寺の跡地（空地）	江戸末期～明治初期に建設した日本家屋の跡地というを性質を活かした外観、光と闇を意識させる空間のデザイン
石橋	千住博	日本画家	2006	製塩業者の家屋	雰囲気を活かしながら作品（絵画）と座席（庭園内の石）が向き合うデザイン
はいしゃ	大竹信朗	現代芸術家	2006	空家（歯医者）	スクラップブックのように様々な要素をランダムに繋ぎ合わせたデザイン
碁会所	須田悦弘	木彫作家	2006	空地	新築のプロジェクト、島内の近隣に所在していた碁会所の記憶を名前に利用

出所：参考文献 19-28 を基に筆者作成

表２　犬島家プロジェクト

犬島・家プロジェクト					
名称	制作者	職業	建設年	敷地	プロジェクトの特徴
S邸	荒神明日香	現代芸術家	2010	空地	サイトスペシフィック・アートと家プロジェクトを融合させた抽象的なデザインによる空間
中の谷東屋	妹島和世／長谷川裕子	建築家／美術評論家	2010		
A邸	荒神明日香	現代芸術家	2013		
F邸	名和晃平	現代芸術家	2010	空地	犬島島内の空き地を活用、外観は既存の島内の生活風景に馴染むようにデザイン
I邸	小牟田悠介	画家	2010		
C邸	下平千夏	現代美術家	2013		

※全ての作品に妹島和世氏（建築家）・長谷川裕子氏が関与

出所：参考文献 19-28 を基に筆者作成

3.2. 修景プロジェクト

直島町では、2002年に「直島町まちづくり景観条例」が施行された。この取り組みの一環で行われた修景事業で、表札とのれんという非常に規模の小さな外装デザインを住民が共有する事で、空き家プロジェクトや、アートサイト直島のプロジェクトのコンセプトである芸術的な雰囲気の演出に住民が関与する機会が生み出されている。

3.3. サイトスペシフィック・アート

1992年に完成したベネッセハウスと同時期に設置されるようになった屋外のアートワークではベネッセ社から委託を受けたアーティストが、それぞれの感性で風景に合わせたデザインのアート作品を作

成するサイトスペシフィック・アートが取り入れられている。海辺に打ち上げられた船のようなデザインや、広大で拠り所のない海の風景を眼前に大地の存在感を感じさせるデザインなど、アートワークを通して見る人に対して砂浜や草地、波止場などの何気ない日々の風景の中に現代的で詩的な想像力を働かせる機会が生み出されている。これらのアートワークは合計で20点に上る。

3.4. 地域の歴史や景観に呼応した拠点のデザイン

アートサイト直島とその周辺地域における一連のプロジェクトでは、地域に残された様々な資源を多面的に活用して現代的な価値を生み出す事が重要なコンセプトとして位置づけられている。この点については建築家によってデザインされる美術館などの拠点的施設にも共通している（表3）。

初期に建設されたベネッセハウス（1992年）では、窓越しの瀬戸内海の景観が図になるように館内設備が簡素なものにまとめられ、展示室においては大きな開口から導かれる自然光の変化による演出が施されている。地中美術館（2004年）では施設が丘陵の地下に収められ、周辺の景観に適応しながら丘陵の内部に入り込むような空間構成が取られている。瀬戸内海の近代産業遺構を活用した犬島アートプロジェクトの精錬所（2008年）では産業遺構が近代化への警鐘を伝える文化施設として再利用され、豊島美術館（2010年）では島を取り囲む波の周期にあわせたかのように床面から水が溢れだす出す仕組みが施されている。このように拠点的な施設のデザインに対しても瀬戸内海の島々に共有される普遍的な景観やコンテキストとの関係性が生み出されている。

表３　拠点的施設のデザインの概要

アートサイト直島の美術館のデザイン		
名称	建設年	デザインの特徴
ベネッセハウス	1992	初期の美術館兼宿泊施設。大きな開口部を使い、自然光を取り込む内部のデザイン
地中美術館	2004	周囲の景観と地形に配慮して建物の全てを地中に埋め込んだデザイン、内部空間のデザインは光と闇をテーマ
精錬所	2008	瀬戸内海の産業遺構を再利用、外観はそのままに、100%再生可能エネルギーで内部の設備を運転。内部にはアーティストによる近代化への警鐘をテーマにしたインスタレーションを配置
李禹煥美術館	2010	洞窟のような小さな祠のような瞑想のための空間のイメージを余白としてデザイン＝岩を穿ってできた荒々しい余白をモチーフにした第二の地中美術館。
豊島美術館	2010	丸い天蓋のあるドーム状の抽象的な空間、内部には地中の動きに呼応するように床から水がランダムに溢れだすインスタレーション

出所：参考文献 19-28 を基に筆者作成

3.5. 島全体を活用したイベントの開催

上述のようなスケールの異なる大小のプロジェクトの節目ごとに、アートサイト直島では島全体を活用したイベントを開催している。ベネッセハウス・サイトスペシフィック・アートに加え、2つの家プロジェクトの完成した2001年、そして6つの家プロジェクト、海の駅直島、地中美術館が揃った2006年にそれぞれスタンダード展・スタンダード展Ⅱが実施された。これらのイベントでは家プロジェクトだけでなく、地域内の商店や道路、水田など、島の中のありふれた生活空間そのものが余剰空間となり、イベント会場として活用された（表4）。

表４　アートサイト直島で開催されたイベントの概要

スタンダード展・瀬戸内国際芸術祭			
名称	会場	開催年	プロジェクトの特徴
スタンダード展・I	直島	2001年	2001年までに完成したプロジェクト（ベネッセハウス、屋外アートワーク、空き家プロジェクト）および島全体を会場として活用
スタンダード展・II	直島	2006年	2006年までに完成したプロジェクト（地中美術館、5つの空き家-護王神社、南寺、石橋、はいしゃ、碁会所を追加、更にプロジェクトの背景となる島内の水田の再生を行うプロジェクトを実施
瀬戸内国際芸術祭2010	直島、犬島、豊島他2島	2010年	2010年までに完成したプロジェクト（犬島アートプロジェクト精錬所（犬島）・家プロジェクト（直島・犬島）・豊島美術館（豊島）に加えて周辺の小さな島々まで会場を拡大。
瀬戸内国際芸術祭2013	直島、犬島、豊島他7島	2013年	2010年の会場に加えて大島、沙弥島、小豆島、伊吹島、高見島を追加。

出所：参考文献 19-28 を基に筆者作成

犬島アートプロジェクトと豊島美術館が完成し、アートサイトの拠点的な開発がひとしきり終了した翌年の2010年には、これらの島々だけでなく周辺の大小の島々を取り入れる形で2度に渡って国際芸術祭が開催されている。これらのイベントの実現に

おいて特徴的な事は、直島とその周辺地域に蓄積した観光資源を有効に利用するだけでなく、類似した環境を持つ周辺の島々に直島で確立したプロジェクトのスキームを適用したこと、更に地域内外の住民や、地域外から参加する若いボランティアによって構成される「こえび隊」がイベントの運営スタッフとなり様々な交流と連携を生み出したこと、これらの要因が相まって広域的な領域に及ぶイベントの開催を社会的にも経済的にも合理的に実現した点にある。

このようにアートサイト直島のプロジェクトでは非常に小さなスケールから大きなスケールに至る大小様々な空間開発とイベントが共存し、建築家やデザイナーだけでなく、一般の地域住民に至るまでプロジェクトに関与する機会が生まれている。特に瀬戸内海に普遍的に存在する生活環境や、水際の原風景的景観に質的な価値を付加する空間開発を通して、対象地域を越えた広域的な領域に共有される波

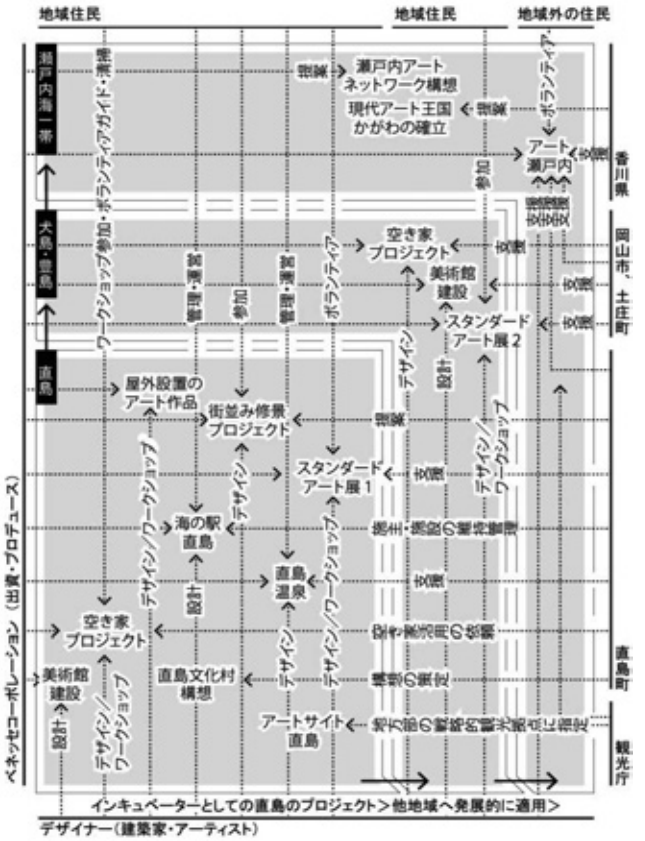

図4　官・民・市民・デザイナーが柔軟に関わりあうアートサイト直島のプロジェクト

出所：筆者作成

及効果を持ったプロジェクトを実現していることが特徴的である（図4）。

4.　生活環境の創造的活用が住民意識に与える効果

生活環境を様々なスケールで創造的に活用することで、人々に空間開発に関与する機会を生み出すアートサイト直島のプロジェクトは、広域圏の持続的な発展だけでなく自律的なガバナンスの形成にも大きな影響を与えている。次頁以降に示す表5、表6は2010年と2013年に開催された国際芸術祭における住民アンケートの結果を瀬戸内国際芸術祭報告書から引用してまとめたものである。2章で述べたように2010年には7つの島が、2013年には更に5つの島が会場として加えられている。

4.1.　主体的な関与への意識の醸成

特に顕著な傾向として2010年・2013年共に新しく芸術祭に関わった島では、飲食場所や宿泊場所の不足などのサービスの改善や近隣における軽食やお茶の提供など、住民が柔軟に意思決定をして関与する活動についての意見が多く出されている。また、イベントで生み出された昂揚感や人間関係を維持するための取り組み、運営体制の提案など、主体的にイベントをより良いものにする当事者意識が生み出されている。2度目の開催を経験する初期の7島では、新たに導入された交通手段に関する課題や、3つの期間に渡って開催する形式の是非など、より運営組織的な視点に立った課題を挙げている。

4.2.　多様な社会的交流を通した生活の質の向上

地域外からの来訪者との交流に対する意見も多挙げられている。「若い世代を含めて多くの人の訪問を感じ、交流をすることで元気をもらった」という声や、「周辺地域がイベントを通して一体となった」、「人間同士のコミュニティをつくりたい」など、生活の質の向上や多様な人間関係を形成することへの意識が生み出されていることが分かる。特にボランティアスタッフとして各地から訪れる若者との交流を喜ぶ声が多いことは、高齢化と人口減少が進む地域における人々のニーズの存在を端的に示してお

り、イベントの継続を期待する声も多い。

4.3.　地域社会の生活環境に対する意識の再構築

多くの来訪者が島に訪れることは、地域住民が自らの居住する地域の環境やアイデンティティについて再考する機会としても捉えられている。「夏でなければ伊吹らしさを見せられない」「島内のガイドツアーをつくりたい」「島をもっと知って欲しい」「島の景色とマッチした作品を設置してほしい」など、居住する島の個性や存在を地域外にアピールしたいという意見が挙げられている。この他には来訪者のマナーや、生活と観光の共存についての意見も多く挙げられている。他地域からの人の訪問を受け入れる中で、共同体としての意識や生活環境の保全、地域性に対する意識が顕在化していることが分かる。

このように日々の生活空間を活用し、住民の多様な関与を可能にするプロジェクトには、多様な社会的交流を生み出すだけでなく、主体的に事業に関与する意識の醸成、人々の生活の質の向上、共同体としてのアイデンティティや生活空間の保全への意識の形成のようにガバナンスの視点においても多面的な効果を生み出している。

4.4.　人口縮退下にある地方部の課題

このようにアートサイト直島とその周辺地域における取組みを集約した国際芸術祭は、地域住民のイベントへの関与や交流を通した生活の質の向上、共同体としての意識の再構築など社会的に多様な効果を生み出している。一方で地域社会の抱える課題に対する声も挙げられている。高齢化の進行や島への

表５　瀬戸内国際芸術祭 2010 年開催時の住民アンケート結果

広域圏形成プロセスの要素	主な意見の大分類	住民から挙げられた個々の意見	直島	犬島	豊島	男木	女木	小豆	合計
経済的・政治的な行動規範	開催期間についての意見	105日間、休みがなく疲れた。やらなくちゃという気持ちだけで皆で協力してやってきた。次回は、休みが必要である（豊島）／今年は特に暑く、105日間は本当に長かった。次回はもう少し短くするなど期間について考えてほしい（女木島）／105日間は長くバタバタして終わった感じだ（小豆島）			1		1	1	2
	主体的な関与への意識の醸成	会期中は、大変な混雑ぶりで泊まるところもない、食べる所もないという状況だった（直島）／3年後では芸術祭の記憶も薄れる。中間点で何かイベントをするとインパクトを与えるのではないか（直島）／島で飲食をする人も多く、島の経済にもある程度貢献があった（豊島）／3年後に芸術祭を開催する前提で、それまでの2年間、豊島として何ができるのか皆で考えたい（豊島）／田舎料理が食べたいという人が多かった。次回開催時の課題と考える（豊島）／来場者に、声かけ案内人になっている島民が多くいた。みんな楽しんでいた（男木島）／自治会が当番制で交流館で「たこめし」を販売していた。105日間続けるのは大変であったが、蛸を獲る人、作る人、売る皆の協力があったから成功した（男木島）／3年後の開催が楽しみである。また協力していきたい（女木島）／島にお金が落ちる仕組みがなかったので、島内に宿泊施設を作るなどを考えなければならない（女木島）／メリットが地元に還元される仕組みを考えてほしい。（小豆島）	2	1	3	2	2	1	10
コミュニティとしての行動規範	生活環境保全への意識	治安も心配したが、特にトラブルもなく、治安も悪くならなかった（直島）／観光客が多すぎて狭い道路では交通に不便が出た（直島）／来る人は皆挨拶がきちんとでき、ゴミのポイ捨てもなくマナーが良かった（犬島）／来場者は、挨拶をよくする丁寧な人が多かった（豊島）／会期後半になると、マナーが悪くなってきた。特に後半に訪れた団体客（男木島）／県道を我が物顔で歩くマナーの悪い人が会期後半に増えた（小豆島）／7月、8月は若い人が多く本当にマナーが良く、ゴミもほとんど落ちていなかったが、9月から10月になると客層が変わり、マナーが悪くなった（女木島）	2	1	1	1	1	1	6
広域圏の意識の醸成	地域のアイデンティティに対する再認識	この機会に他の島に行ってみたが、島の状況の違いに驚いた。男木島と比べると犬島がフラットで住みやすい島だとわかった（犬島）／あらためて豊島の良さを全国の人に知ってもらい非常によかった（豊島）／大勢の人にハンセン病の施設を知ってもらったことが良かった（犬島）／船で旅をするというコンセプトが良かったのではないか（小豆島）		2	1			1	3
多様な人間関係の形成	共同作業を通した交流	町民の関心が高く、掃除の共同作業で多くの町民が集まった（直島）／アーティスト、こえび隊とのつながりを大切にしていきたい（男木島）／島は高齢者ばかりであり、3年後皆3つ歳を取るので本当にやっていけるか心配だが、元気だったらぜひやりたい／次回はもっと若い人に関わってもらえるようにしなければならない。（男木島）／作家やこえび隊とのつながりを今後もずっと持ち続けていけるような仕組みを考えなければならないのではないか（女木島）	1			1	1		3
	多様な世代間の交流	住民と観光客とのコミュニケーションが多く生まれた（直島）／犬島には子供がいない。子供と家族連れが大勢来てくれたことに感激した（犬島）／若い人と話ができ若返った（犬島）／都会の若い人と話ができ、皆イキイキとしていた。お年寄りが元気をもらった（豊島）／宿に迷惑がかからない程度に若い人を泊め、酒を飲みながら話をするのが楽しみであった（男木島）／アーティスト、こえび隊とのつながりができた（男木島）／島始まって以来の客で、いろいろなふれあいが出来たことが嬉しかった（男木島）／子海老鯛を含め関係者の挨拶引導が徹底しており、気持ちが良かった（女木島）／島がこんなに賑わい活気づいたことはこれまでなく、本当に皆元気をもらった（女木島）／小豆島に新しい風が吹いた。小豆島の観光客の層が変わった（小豆島）／これだけ、若い人、女性が来るとは思わなかった（小豆島）	1	2	1	3	2	2	9

出所：参考文献 29 を基に筆者作成

表6　瀬戸内国際芸術祭 2013 年開催時の住民アンケート結果

主な意見の大分類		住民から挙げられた個々の意見	直島	犬島	豊島	男木	女木	沙弥	本島	大島	高見	伊吹	小豆	粟島	合計
経済的・政治的な行動規範															
	3期に分ける開催に肯定的	間の期間で課題箇所を修正できた／観光客の平準化を図るには、7・8月の繁忙期は除いてよい（直島）／通常人が来ない時期に人が来たのでよかった（犬島）／春はもう少し（10日ほど）長くしても良い（豊島）／来場者を分散できた（女木島）／来場者の質の面でも、島民の生活の面でも妥当（男木島）／島民にとっても中休みができた（男木島）／あっという間に会期が終了した（沙弥島）／もう少し（7～10日間）長くても良い（本島）／最初はとまどった（本島）／期間31日間は短かった（高見島）／開催時期はちょうど良かった（粟島）夏は、暑や海水浴で忙しい（本島）／秋開催で良かった（高見島）	3	1	1	2		1	3		2				13
	3期に分ける開催に否定的	3回に分けるには体力的にも運営するのも大変（直島）／芸術祭の間の帰還、島民が落ち着かない（直島）／3期間に分けて来場者が平準化された（犬島）／シーズンごとのパスポートは、複雑で販売しづらい（豊島）／夏は若手がイリコで忙しい（伊吹島）／秋の方が、島民ボランティアが参加しやすく、体力的負担が少ない（伊吹島）／全体のパスポートは無駄が多い（粟島）／夏には海水浴客が多い（粟島）	2	1	1							2		2	8
	主体的な関与への意識の醸成	核となるアート作品や、共同制作や作家との交流の機会が欲しかった」（直島）／豊島では民泊が数件あるが、小豆島でも民泊を考えたらいいと思う（小豆島）／今後に向けて島内を巡るガイドツアーやコースも作りたい（豊島）／会期中でも各会場の状況を把握して地域住民の声を聞きながら日々の改善をしてもらいたかった（小豆島）／島民にもメリットができる仕組みが必要（女木島）／自然がテーマの作品展開なので、島の景色とマッチした作品を展示してほしい（女木島）／作品のお披露目として餅投げや餅つき、豚汁のふるまいをした。協力できて満足している（小豆島）／麦茶のお接待くらいであれば自宅前でやれば良かった（粟島）／上新田のブイブイガーデン等への送迎用の車があれば、ボランティアで案内ができた（粟島）	1		1		2					2	2		8
	芸術祭の運営についての感想	案内所のスタッフの貢献度はすごい。とても素晴らしかった（直島）／分からなくてもきれいな作品なので満足し、よかったという人も多い（犬島）／たくさんの飲食店ができ、食事の問題はなかった（豊島）／案内所は外国の来場者に対しては非常に助かった（直島）／地域振興として若手作家の育成の場として重要（直島）／運営については特に問題はなかった。案内所の統制は取れていた（犬島）／カフェは島民と来島者が話せる場としての役割も果たした（大島）／次回は島地区全体の活性化を踏まえて開催場所を決めなければならない（沙弥島）／来島者は素朴感を求めている（粟島）／島内ガイドが必要であった。島についての説明を求める来島者が多かった（本島）	1	2	1			1	1	1		1	2	1	10
			7	4	4	2	2	2	4	1	2	2	3	6	39
コミュニティとしての行動規範															
	共有地としての生活環境への意識	ごみのポイ捨て、自転車の放置など、マナーの悪い人が見受けられる（直島）／展示場所の敷地の片隅にごみを捨てられた。他の人がそれに続いて参った（豊島）／以前に比べるとごみのポイ捨ては減った（女木島）／以前に比べるとごみのポイ捨ては減った（女木島）／来場者が道いっぱいになって歩くなど、通行者のマナーはあまり良くなかった（女木島）／来場者のマナーは一部を除き、前回より良くなったと思う（男木島）／道いっぱいに広がって歩く人が通行の妨げになったが、ごみの問題はなかった（犬島）／お客さんのマナーも非常に良かった（沙弥島）／来場者の動線が集落の中に入っていなかったのが良かった（沙弥島）／来場者のマナーは非常に良かった。ごみも少なかった（本島）／来場者のマナーは良かった（高見島）／芸術祭の開催によって島民の意識が変わったようだ（高見島）／多くの来島者があり驚いたが、マナーは良かった。来場者のマナーは全体的に良かった（伊吹島）／ガードマンが党内に車を入れさせなかったのが良かった。期間中も平穏な日々を過ごせた（沙弥島）	1	1	1	1	3	3	1		2	1			14
	生活環境の改善への意識	島の西側のエリアにも作品展開をして欲しい（本島）／回ごとに残る作品があれば観光資源になり島の活性化に繋がる（伊吹島）／高級作品として猪鹿垣を残してくれた。地元も協力するので何か残るものを作ってほしい（小豆島）／芸術作品はガイドする対象になり、ありがたい。交流の場として残してほしい（小豆島）／作品の説明があった方が良い（本島）							2			1	2		5
	移動の安全性について	バスや自動車の往来がある場所に来場者が多く、安全管理が課題（直島）／大きな事故や問題がなく終われたことが良かった（直島）／自転車の放置もあり、バスの運行への支障や島民からの苦情も出ていた（直島）／自転車がたくさん島内を走っているので少し危なかった（豊島）／自転車のマナーも良くなかった。通行の邪魔になった（女木島）	3		1		1								5
	移動手段の拡充について	バスの運行路線は、豊島を一周して欲しい。アートだけでなく豊島の自然を堪能して欲しい（豊島）／自転車の台数がかなり増えたので、作品設置個所には駐輪対策が必要（豊島）			2										2
			4	1	4	1	4	3	3	0	2	2	2	0	26
多様な人間関係の形成															
	若者との交流	交流の中で元気をもらうことができた（小豆島）／多くの人に来てもらい、いろんな人と話をすることができた（高見島）／遠方から来る人が多く、驚いた（大島）／こえび隊の説明のおかげか、来場者がコンセプトを理解して訪れるのが嬉しかった（大島）／スタッフの教育がもっと必要である（豊島）／こえび隊は体力的にも辛かったと思うが頑張ってくれた（大島）／県・市職員・緊急雇用・ボランティアともよくやってくれた（本島）			1				1	3	1		1		7
	共同作業を通した交流	作品の制作を通じて与島地区が一つになれた（沙弥島）／作家同士が仲良くなり、互いに手伝うなど、良い雰囲気になった（本島）／作家については良い人が来てくれた（沙弥島）／作家は最初はとっつきにくい印象だったが、作業などを手伝ううちに打ち解けた（伊吹島）／小中学校でワークショップなどを開催してもらい、生徒たちの駆になった。（伊吹島）／作家は、共同作業をしたという思いがあり、協力してくれる島民も多かった。（粟島）／手作り感のある人間同士のコミュニティを作る機会としたい（粟島）／高齢化で島民が作品制作等に協力できないこともある。島民に負担をかけないでもらいたい（高見島）						2	1		1	2		2	8
			0	0	1	0	0	2	2	3	2	2	1	2	15
広域圏の意識の醸成															
	芸術祭を通した一体感の醸成	いい思い出になった（女木島）／次回も開催を望む（犬島）／芸術祭があるとイキイキする。次回も是非やってもらいたい（男木島）／2016年の芸術祭も行政と協力しながらやっていきたい（小豆島）／次回の開催については、本島実行委員会の総会で議決したとおり、芸術祭2016に参加したい。（本島）／次回も継続した方が良い（伊吹島）／芸術祭を契機に犬島を知ってもらいたい（犬島）／島の中をもっと見て欲しかった（粟島）／瀬戸芸を通じて、地域が一丸に。島民同士の結束ができた（本島）		2		1	1		2			1	1	1	9
	インフラの整備について	船会社は協力的で、繁忙対応もスムーズだった（男木島）／次回は、豊島や直島を結ぶ航路の拡充を期待する（男木島）／大島が来やすいところになればと思う（大島）／大島にくるには、やはり船に制限があることが課題である。（大島）／西の三島（本島・高見島・粟島）を横の航路で結んで開催したことが良かった。お客さんも喜んでいた（高見島）／3島航路ができたので、4船の時間を気にして駆け足で作品巡りする人が多かった（粟島）／三島航路ができて行ったことがなかった高見島や本島に粟島から行けたのが良かった（粟島）				2				2	1			2	7
			0	2	0	3	1	0	2	2	1	1	1	3	16

出所：参考文献 30 を基に筆者作成

アクセスの課題についての言及も見られ、「島民に負担をかけないでほしい」「3年後にまだ元気だったらやりたい」「次回はもっと若い人に関わってもらうようにしなければならない」という意見が挙げられ、地方部における余剰空間の活用には人口縮退の問題の根本的な改善という点では大きな課題が残されていることが分かる。また、島へのアクセスの不便さや、新しい交通体系の整備の課題に対する声も挙げられ「島に来るには船に制限がある事が課題である」という声が挙げられているほか、2013年のイベント開催時には新しく瀬戸内海の島（本島・高見島･粟島）へアクセスする航路が開通しており、「新航路ができて行ったことがなかった島にいけて良かった」「お客さんも喜んでいた」という意見もあり、アクセス性の悪く辺鄙な地方部における自由な移動を支えるインフラの重要性を伺うことができる。

5. 多様なスケールを横断した余剰空間の創造的活用による持続的な広域圏形成のプロセス

アートサイト直島のプロジェクトの展開についてまとめると、未利用状態にある空地を介して地域の生活空間における大小さまざまな開発を集積させながら、プロジェクトとそのプロセスの中で関わる人間関係のネットワークの規模を広げていることが特徴として挙げられる。プロセスを牽引する主要なプロジェクトの意思決定に関しては民間企業のベネッセ社が中心であり、強いトップダウン的な性格を呈している。しかし関係する様々な主体がそれぞれの立場に合わせた等身大の介入方法を生み出すことで、地域社会のコミュニティを維持させていくと同時に､広域的な人的ネットワークの形成を促し､日々の生活の質を高めるようなボトムアップ的な活動が自然と発生している。このような持続的な広域圏形成プロセスの特徴は｢余剰空間の多面的な活用｣｢多様な空間的次元を横断した関係性の形成｣､｢文化的アイデンティティの形成｣｢生活の質の向上と人間

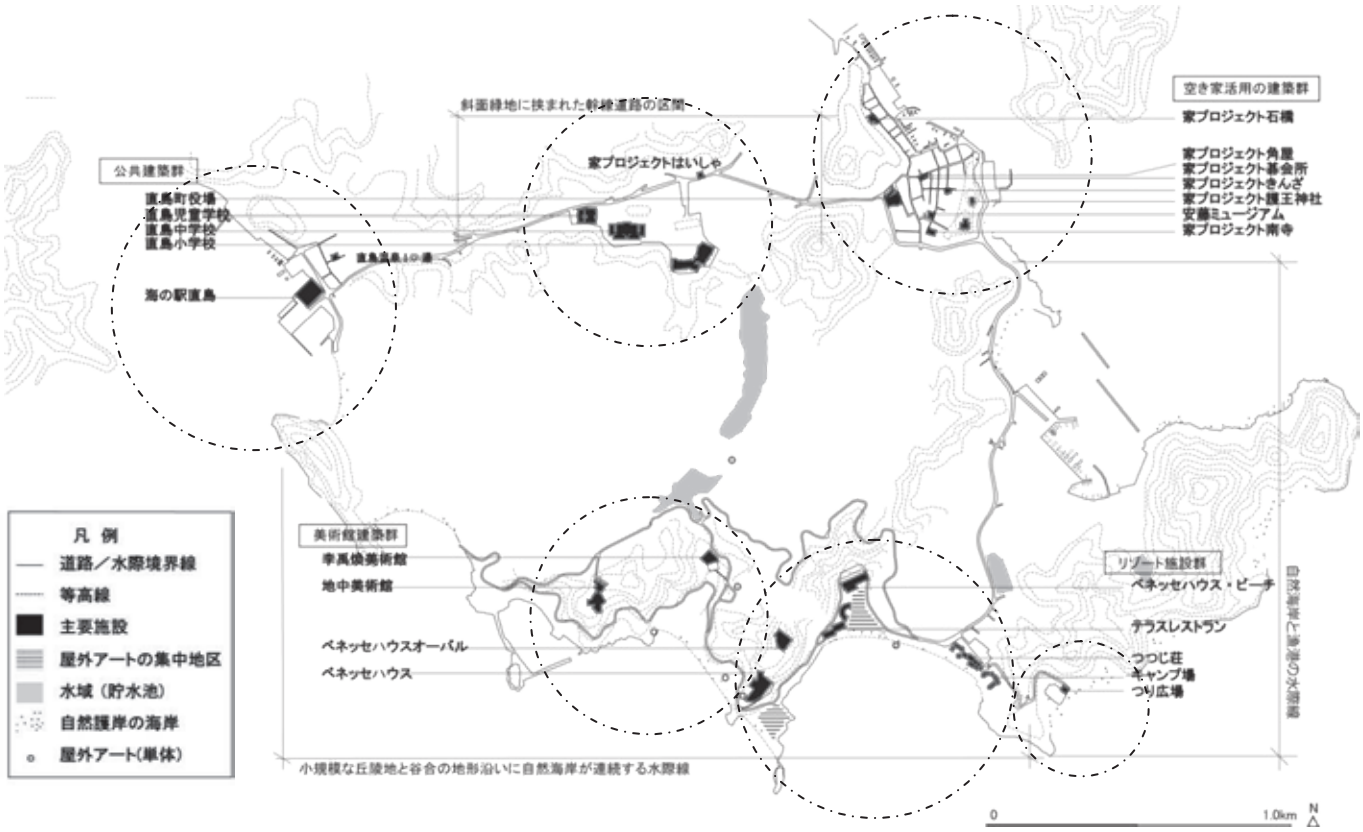

図5　性格の異なる地区が原風景的景観を介して連続するアートサイト直島の配置構成

出所：筆者作成

性の再生」、「フレームワークに沿ったプロセス志向の発展」の理論的枠組みを通して以下のように整理することができる。

5.1.　多様な余剰空間を活用した空間開発の集積

アートサイト直島のプロジェクトの展開を見ると、1990年代初期までの開発は高度経済成長期後半のリゾート開発的な土地の活用から、高度経済成長期以降の効率的で実現性の高い開発へとプロジェクトの開発方針が大きく転換している。これは初期のベネッセハウスを町民に開放する取り組みや、屋外に設置される小規模なアートワークの導入が始められた時期に見る事ができる。

更に国内各地の地方で進む人口流出と高齢化という社会現象によって道路・漁港・砂浜・草原といった低利用状態にある景観資源だけでなく、空き家という余剰の資源も生み出され、ベネッセ社による空間開発への介入の機会を広げている。これらの余剰空間に対してはリノベーションや期間を限定したイベントの開催など、等身大の介入が可能であり、何気ないありふれた日々の生活の場面に現代的な価値が創出されている。そしてこれらの開発の集積によって新しい拠点的な施設の開発の機会が生み出されている。多様なスケールを横断した余剰空間の活用は、このような再帰的なプロセスによる持続的な空間開発とその集積を可能にしている（図5）。

5.2.　生活の質の向上と人間性の再生

アートサイト直島における空間開発は、建築家やアーティストの詩的表現を現実の空間として具現化する機会であり、均質で無個性化した公共空間における人間性の回復としても捉える事が可能である。公共空間が人間的な感性によるデザインを取り戻す事で、訪れる人々に対して均質で制約された社会からの束の間の解放を体験する機会が生み出されている。また、住民の何気ない創作活動を質の高いデザインに引き上げるために生活空間に密接に関わる場所にデザイナーが関わる空間開発が行われる事で、住民による自主的な維持管理や来島者へのサポート、修景事業への参加など、住民一人一人に対して柔軟で開かれた関与の機会が生み出されている。このような一般の人々へのエンパワーメントもまた、衰退する地域に居住する一般の人々の生活の質を高める役割を果たしている。

5.3.　文化的アイデンティティの再生

余剰空間を活用した空間開発とその集積による開発の機会の創出は、新しい文化的なアイデンティティの形成のプロセスでもある。アートサイト直島で生み出されたサイトスペシフィック・アートや空き家プロジェクトでは、地域の歴史・生活文化や原風景的景観の意味付けを反映したデザインが各所に施されている。また、プロジェクトの節目毎に建設される拠点的施設のデザインを見ると、周辺の景観を建築内部に「取込む」初期のデザイン（ベネッセハウス）から、周辺環境への「適応」（地中美術館）、周辺環境の「再利用」（精錬所）、周辺環境の「反映」（豊島美術館）へと変化し、プロジェクトのコンセプトの深化の過程が現れている。地域の生活空間や原風景的な景観と呼応する大小の空間開発が、様々なボトムアップ的な活動との相乗効果を生み出すことで、直島とその周辺地域には衰退する地方部にありながら持続的に新しい空間と交流が生み出される独自の社会的・文化的アイデンティティを形成している（図6）。

図6 瀬戸内海の新しい文化的アイデンティティ
出所：筆者作成

5.4.　多様な空間的次元を横断した関係性の形成

アートサイト直島ではプロジェクトの初期から、

地域にある余剰の資源を活かしながら多様な社会的関係を生み出している。ローカルなスケールでは、日々の生活の場面における空間開発を通して地域住民に柔軟で開かれたプロジェクトの関与を可能にし、その過程でアーティスト、来訪者、住民、自治体関係者などの間で様々な交流が生み出されている。マクロなスケールでは2004年には上位行政機関の香川県により、現代アートを基軸に据えた広域的な地域振興の構想の提案が行われ、国土交通省内の観光庁からは戦略的な観光拠点としての指定（2008年）を受けるなど、計画行政的な視点からも密接な関係性が生まれている。

2010年と2013年に開催された瀬戸内国際芸術祭において、都市部を始めとする地域外から多くのボランティアスタッフが参加し、2010年には実働800人、2013年には実働1300人のスタッフが広域的な領域に及ぶ会場の運営に関与している。このように都市部と地方部の関係性という視点においても、アートサイト直島ではさまざまな主体を取り込みながら、地理的な隔たりを越えた多様な社会的関係性を生み出している。

5.5. フレームワークに沿ったプロセス志向の発展

アートサイト直島では、「原風景と地域のコンテキストを活かした空間の質の創出」という緩やかで計画的なフレームワークを維持しながら、その時々の社会情勢や地域社会のニーズに応える等身大の開発を人々の日々の生活環境で実践している。そして多様な空間開発の集積を通して大きな発展の機会を生み出す再帰的な空間開発のプロセスは、地方部の何気ない日々の生活の空間をローカルなレベルから国際的なレベルに至る、多様なスケールを横断した交流のためのプラットフォームへと質的に発展することを可能にしている。

ベネッセ社はアートサイト直島で実現する空間の質を維持するためにデザイナーの起用や主要なイベントのコーディネート、基金の設立による開発資金の調達といった大きな枠組みの構築とマネジメントの役割を担っており、ボランティア活動や地域の生活環境の維持などの個々の活動の意思決定に対しては地域住民や行政関係者、ボランティア参加者達の主体性に委ねる、柔軟で開かれた関与の仕組みを生み出している。このようなスキームに基づき発展的に展開する広域圏形成がアートサイト直島の一連のプロセスの大きな特徴といえる。

6. おわりに

6.1. 研究の総括

本稿では日本の地方部における広域圏形成の事例としてアートサイト直島を取り上げ、社会的広域圏形成プロセスの理論的枠組みを適用することで以下の点を明らかにした。

⑴まず2章、3章におけるプロジェクトの概要分析では、民間企業であるベネッセ社による20年近くの継続的な関与の下で持続的にプロジェクトが発展してきた経緯を整理し、特にその過程で生み出され間開発の特徴を体系的に整理した。

⑵4章では日々の生活空間を活用し、地域住民の関与を可能にする空間開発が人々の意識に与える影響について、地域住民へのアンケート調査の結果を基に整理し、人々の主体的なプロジェクトへの関与や共同体のアイデンティティの再認識に及ぼす効果、地域の抱える課題の共有など、地域住民にガバナンスへの意識が生み出されていることを明らかにした。

⑶5章では社会的広域圏形成プロセスの理論的枠組みを適用し、プロジェクトを詳細に検証することで、現代アートと瀬戸内海の原風景という異質な組み合わせによる様々なスケールの空間開発が、衰退する地方部の生活空間に現代的な価値と社会的交流の機会を生み出す多面的効果を有していることを明らかにした。

6.2. 持続的な広域圏形成の課題

一方、アートサイト直島と関連地域では高齢化と人口減少が依然として進行しており、人口縮退という社会問題の抜本的な改善という点では大きな課題が残されている。また、アートサイト直島では近年、英語圏や中国語圏の観光客を対象にしたＰＲや接客のための体制づくりが進められており、更に周辺地

域で進められる四国創生という新しい広域圏形成の動向との関係の中で、現代アートによるツーリズムを柱とした地域再生の取り組みは新しい局面に差し掛かっている。

地方部で開発の影響を受けずに残されてきた島々の美しい原風景と、それらを日々の生業を通して維持してきた地域住民の歴史が都市部のニーズを満たす一過性の消費の対象にならないように、多様な世代が混住し、ベネッセ社を始めとする多様な事業主体が協働で広域圏の発展を持続させていく、柔軟で開かれた組織体制が昨今の地方部の厳しい社会経済的情勢下では重要と考えられる。

このためには地理的な隔たりを越えた定期的な人の移動と交流を伴うプログラムの開発や、広域圏という枠組みの中でのワークシェアリング、社会福祉活動や景観維持活動等を目的とした、会計年度に捉われることのない都市部と地方部の自治体間のジョイント予算の提案など、既に確立したプロジェクトのスキームに対して社会的持続性の視点から再度アプローチする事が重要と考えられる。

参考文献

(1) 清水 李太郎、坂井 猛：社会的広域圏形成プロセスの理論的枠組みに関する考察、九州大学人間環境学府・都市建築学研究 (30)、pp.12-22、2016

(2) Corner James: The Agency of Mapping, in Denis Cosgrove, I. Meder (ed.) Mappings; London, Reaktion Books, 1999, pp.211-252, 1999

(3) Corner James:Landscape Urbanism, in Moshen Mostafavi and Ciro Najle (eds.) Landscape Urbanism A Manual for the Machinic Landscape, London: AA Books. pp.58-63, 2003

(4) Corner James:Ecology and Landscape as Agents of Creativity, in George Thompson and Frederick Steiner (eds.) Ecological Design and Planning, New York, John Wiley and Sons, pp.81-108, 1997

(5) J.B Jackson: The Word Itself, in J.B Jackson (ed.) Discovering the Vernacular Landscape, New Haven, Yale University Press, pp.1-8, 1984

(6) J.B Jackson: Concluding with Landscape, in J.B Jackson (ed.) Discovering the Vernacular Landscape, New Haven, Yale University Pres, pp.145-158, 1984

(7) Moulaert Frank, Nussbaumer Jacques:The Social Region Beyond the territorial dynamics of the learning economy, in European Urban and Regional Studies, 12(1), pp. 45-64, 2005

(8) Moulaert Frank, Nussbaumer Jacques:Beyond the learning, the Dialectics of Innovation and culture in territorial development, in Learning from Clusters- A critical assessment, 12(1), pp.89-109, 2005

(9) Moulaert Frank:Social innovation and community development concepts, theories and challenges, in Moulaert Frank, Martinelli Flavia, Swyngedouw Erik, Gonzalez Sara (eds.), Can a neighborhood save the world?, Routledge, New York, pp.4-16, 2010

(10) Moulaert Frank, Martinelli Flavia, Gonzalez Sara, Swyngedouw Erik: Introduction: Social Innovation and Governance in European cities - Urban development between path dependency and radical innovation, in: European Urban and Regional Studies, 14 (3), pp. 195-209, 2007

(11) Moulaert Frank: Social Innovation: Institutionally Emb edded, Territorially (Re) Produced, in Maccallum Diana, Moulaert Frank, Hillier Jean, Vicari Haddock Serena (eds.), Social Innovation and territorial development, Ashgate Publishing Limited, Farnham, 2009, pp. 11-24

(12) 遊佐 敏彦、後藤 春彦、鞍打 大輔、村上 佳代：中山間地域における空き家およびその管理の実態に関する研究、山梨県早川町を事例として、日本建築学会計画系論文集 (601)、pp.111-118、2006

(13) 中園 眞人、山本 幸子：「ふるさと島根定住財団」の空き家活用助成制度と自治体の取り組み - 農村地域における空き家活用システムに関する研

究、日本建築学会計画系論文集 (603)、pp.65-72、2006
⒁ 中園 眞人、繁永 真司、村上 和司、山本 幸子、鵤 心治 : 地方都市中心市街地における空き家の活用意向と借家再生の可能性、定期借家方式による民家再生システムに関する研究、日本建築学会計画系論文集 (618)、pp.109-116、2007
(15) 中園 眞人、山本 幸子 :「ふるさと島根定住財団」の空き家活用助成制度を利用した民家改修事例、農村地域における空き家活用システムに関する研究、日本建築学会計画系論文集 (620)、pp.111-118、2007
⒃ 山本 幸子、中園 眞人 : 島根県西ノ島町の中高齢世帯移住促進事業による空き家活用事例 - 農村地域における空き家活用システムに関する研究、日本建築学会計画系論文集 (629)、pp.1485-1492、2008
⒄ 山本 幸子、中園 眞人、利光 由江、渡邉 弘崇 : 中山間集落における空き家を活用した都市農村交流施設の整備プロセス －集落住民を主体とする改修・増築工事の事例研究－、日本建築学会計画系論文集 (676)、pp.1423、2012
⒅ 山本 幸子、中園 眞人、「地方自治体の空き家改修助成制度を導入した定住支援システムの運用形態」、日本建築学会計画系論文集 (687)、pp.1111、2013
⒆ 佐々木雅幸、川井田祥子、萩原雅也 : 創造農村 - 過疎をクリエィティブに生きる戦略、学芸出版社、2014
⒇ 秋元 雄史、安藤忠雄 : 直島瀬戸内アートの楽園、新潮社、2006
(21) 笠原 良二：ベネッセアートサイト直島の活動の軌跡とその意義 - 現代アート活動による地域活性化の一例 -、財政と公共政策 (50)、pp.67-75、財政学研究会、2011
(22) 笠原 良二 : 現代美術活動を通した島の活性化～ベネッセアートサイト直島の活動の軌跡～、第三回 今後の瀬戸内海の水環境の在り方懇談会配布資料、環境省、2010、http://www.env.go.jp/water/heisa/seto_comm/003/mat00.pdf、last consulted on 18/01/2012
(23) 笠原 良二：現代アートがもたらした島の誇りとアイデンティティ、Civil Engineering Consultant vol.245 October、pp 24-27、2009
(24) 長畑実 , 枝廣可奈子：現代アートを活用した地域の再生・創造に関する研究 - 直島アートプロジェクトを事例として、大学教育 (7)、pp.131-143、山口大学 大学教育機構、2010
(25) 高見澤なごみ、古田賢、枝木紗子、永井彩子、後山剛毅：ベネッセアートサイト直島における「直島らしさ」の形成をめぐって、「Core Ethics」、(12)、pp.331-341、立命館大学大学院先端総合学術研究科、2016
(26) 宮本結佳：住民の認識転換を通じた地域表象の創出過程：香川県直島におけるアートプロジェクトを事例にして、社会学評論 63(3)、391-407、日本社会学会、2012
(27) 宮本結佳：現代アートを媒介とした景観創造の実践：作家・住民間の場所解釈をめぐる相互作用と作品の地域資本化、滋賀大学教育学部紀要 (2)、人文科学・社会科学 vol.61、15-27、滋賀大学教育学部、2011
(28) 西田正憲：自然・景観・観光をめぐる動きと風景へのまなざし、奈良県立大学研究季報 19(3)、7-35、奈良県立大学、2009
(29) 瀬戸内国際芸術祭 2010 総括報告書、http://setouchi-artfest.jp/news/topics/detail7.html、last consulted on 2016/05/04
(30) 瀬戸内国際芸術祭 2013 総括報告書、http://setouchi-artfest.jp/news/topics/detail7.html、last consulted on 2016/05/04